

『 読書・感想文 』

子どもの頃、夏休みの課題の一つとして読書感想文がしばしば出されました。私としては、課題の中では、最も苦手とするものでした。テーマが自由の作文なら、まだ何とかなるのですが、読書感想文にはほとんど困りました。苦い思い出ばかりです。

小学3年生の時だったと思います。明日から学校が始まるにもかかわらず、読書感想文だけがまだ手つかずの状態でした（嫌なので避け続けていました）。感想文の対象となる本すら読んでいませんでした。さすがに、やらずに済むものではないので、ようやく重い腰を上げて、学校の図書室から借りた本を読みました。

この本の題名も内容も覚えていませんが、そんなに厚い本ではなかったので、午前中には読み終えたと思います。午後から、感想文にとっかかりましたが、困ったことに全く言葉が浮かびません。けっこうな時間、原稿用紙とにらめっこしていましたが、状況は好転しません。日もだいぶ傾いたあたりから、「まずいぞ。まずいぞ」と、焦りが出てきました。

どうしようもなくなり、登場人物がしたことを延々と書き連ね、最後に申し訳程度に、「〇〇は、すごいと思いました」みたいな感じで書き終わったと思います。400字詰め原稿用紙の五分の四くらいはうめました。

「書いたぞ!」という、達成感は微塵もありませんでした。「こんな感想文を提出していいのだろうか」と思い、今一度読み直しました。自分に腹が立ちました。「だめだ。だめだ」と、全部消しゴムで消してしまいました。目の前には、所どころ文字の跡が残った薄黒い原稿用紙がありました。

「何とかしなくては」と思い、本をもう一度読みました。残された時間はそんなにありません。結局、3か所ほど、登場人物のしたことを取り上げて、その都度、「〇〇はよくやったなと思います」とか、「ぼくだったら〇〇のようなことはできません」とか、「その時の〇〇の気持ちがわかります」などと言感想を書き添えて終了。実に辛い一日であったなと記憶しています。

その後、中学・高校・大学と、読書感想文を書く機会がなかったことは幸いでした。ところが、教員になってから、今度は自分が、子ども達に読書感想文を夏休みの課題として出すことが何度かありました。このことは、もちろん私個人の判断ではなく、職員会議や学年の打合せ等で協議し確認されたものですが、何となく後ろめたさや罪悪感がありました。

ちなみに、言い訳になりますが、読書感想文の書き方をちゃんと教えてもらった記憶がないのです。おそらく、授業の中で指導されたことはあったのかもしれませんが、悲しいかな全く自分の中には残っていませんでした。また、教員になってからも、読書感想文の書き方をちゃんと指

導した記憶もないのです。もちろん、教科書の物語教材の指導後にはよく書かせました。この時は、授業の中で、登場人物の心情や場面の情景などを十分に読み取ることをしてしますので、子ども達も、何か心に残るものがあります。したがって、それなりの感想文を書いていました。

だからと言って、教材以外のいろいろな本を読んだ後で、その感想文がスラスラと書けるかと言えば、それはなかなか難しいことではないかと思っています。

読書感想文を書かせるに当たって、どのような指導があるのかと思い、一度、全国読書感想文コンクールの入賞作品を読んだことがあります。まさに驚きの一言でした。

「これは、普通の作文ではないか！（ちゃんとした立派な作文という意味です）」という印象が強かったです。大まかに言いますと、登場人物の生き方に対しての共感、時には批判が述べられたり、自分の生活や日頃思っていることと比べたりしながら、結びは、これからどういう生き方をしていくかという決意や覚悟のような記述がありました。言い換えますと、作品のテーマに鋭く迫っているのです。一方で、その読書感想文を読んでも、どんな内容の本なのかは私にはよくわかりませんでした。

「なるほどな」と感心しながらも、読書感想文を書くということは改めて手ごわいなと思いました。まずは、本を読んで「どれだけ感じたか。どれだけ心が動いたか」があること。さらに、日頃から身のまわりの事象に対して関心を持ち、自分の考えを持っていること。これらがないと感想文はなかなか書けるものではないと感じました。

私にとって、トラウマのようにになっている読書感想文ですが、先達で生まれて初めて読書感想文を書いてみたい（書けるかも!）と思える本と出会いました。

数年前に芥川賞を受賞した本でした。純文学はあまり読まないのですが、そのタイトルや内容に関する若干の情報からけっこう興味を持っていました。一度、当町の図書館で探したのですが見つけれず、後日、職員の方に「〇〇ありますか?」と訊きましたら、10秒足らずで「これですね」と、持ってきてくれました。

その本は、ページ数はわりと少なめでしたので、読みやすさを感じました。しかしながら、その内容は、私の想像と遥かにかけ離れたものでした。強い衝撃を受けましたが、読後、なぜこのタイトルにしたのかは、自分なりに納得できましたし、ある意味ぐっと心が動いたのです。こんな状態になると、書きたいことがけっこう湧き出てくるものなんだなと思いました。

結局は、この本の感想文は書きませんでした。読書感想文を書くに当たっての自分なりのイメージというか構えは少し掘めたような気がしています。また、それなりの冊数を読んでいくと、何となくでも、登場人物の生き様に対する自分なりの捉えが生まれてくることも感じています。

心がぐっと動かされた時が、読書感想文を書けるチャンスと思っています。ただ、読書は、感想文を書くことが目的ではありません。読後、「この本、おもしろかった!」で、いいのではと思っています。そして、本の中で様々な生き方や考えや世界に触れることで、ちょっとでも何かを感じたり視野が広がったりすることがあれば、それは素敵なことであり、また幸運なことではないかと考えます。